

## 発刊によせて

「質の高い成長」は、生産や所得の継続的な伸びを指標とする伝統的な成長の概念に包摂性や持続可能性、強靱性（レジリエンス）の観点を付け加えた新しい概念です。国全体の生産や所得を上げることだけを考えるのではなく、格差や雇用、環境問題、災害や経済危機といった人々の生活に直結する問題への対応や、それを支える制度や統治構造（ガバナンス）の改善にも目配りするかたちでの成長の実現を求めるものと理解されています。

「質の高い成長」に関する議論は国内外で盛んになっています。2010年のアジア太平洋経済協力（APEC）首脳会議をはじめとする国際会議の場で「質の高い成長」に関する議論が行われ、その精神は2015年に国連で採択された「持続可能な開発目標（SDGs）」に盛り込まれました。日本の開発協力政策である「開発協力大綱」も2015年の時点から重点課題の一つとして「質の高い成長」を掲げ、2023年の改定版もその方針を継承しています。国際協力機構（JICA）は、その開発協力大綱のもと「人間の安全保障」に加えて「質の高い成長」の実現をミッションに掲げ、開発途上国への開発協力を行っています。

今日、日本を含む世界各国が、気候変動や感染症といった地球規模の課題、ウクライナでの戦争やこれに伴う経済的なリスクといった複合的な危機に直面しており、「人間の安全保障」への脅威が日に日に高まっています。もちろん、各国における貧困や格差、雇用、環境問題といった従前からの課題に取り組むことの重要性も変わりはありません。このような状況のもと、包摂性、持続可能性、強靱性（レジリエンス）を兼ね備えた「質の高い成長」の概念に注目することの意義は、かつてないほど高まっているといえるでしょう。

「質の高い成長」は、その概念の新しさゆえに数多くの疑問を私たちに投げかけるものです。たとえば、「質の高い成長」が持つ包摂性や持続可能性、強靱性（レジリエンス）といった性質は具体的にどのようなものであり、伝統的な成長の概念とどのように結びつくのでしょうか。また「質の高い成長」の度合いを測ることはできるのでしょうか。そして何よりも「質の高い成長」を実現するため

にはどうすればよいのでしょうか。本シリーズは、上記のような問いに答えることを目的として刊行されるものです。

第1巻『質の高い成長概論』（編著：広田幸紀）は、「質の高い成長」の概念を経済学の理論を使って体系的に説明するとともに、その度合いを測る指標の構築に取り組むことで、「質の高い成長」についての包括的な解説を行うものです。また具体的な事例としてインドネシア、ベトナム、ペルー、コスタリカ、マダガスカルを取り上げ、「質の高い成長」の視点から見ると、各国の発展はどのように評価されるかを考察しています。

第2巻『SDGs、変革、質の高い成長』（細野昭雄）は、日本が開発途上国に対して行った開発協力の事例を分析することで、「質の高い成長」を実現するための方法論を検討するものです。「質の高い成長」と密接な関係にある概念として経済・社会の「変革」に着目し、各国の政策担当者や開発協力機関の実務者らがとりうる具体的な方策を考察しています。本書で取り上げる国際協力の具体的な事例は、アジアやアフリカ、ラテンアメリカ諸国における産業開発やインフラ開発、農業開発、都市開発など多岐にわたります。

本シリーズは、国際協力機構（JICA）緒方貞子平和開発研究所の「『質の高い成長』にかかる研究」プロジェクトの成果です。研究成果の取りまとめにあたっては、本分野の第一人者である細野先生・広田先生に執筆・編集の労をお取りいただくとともに、各国の経済事情に通じたJICAの職員や専門家の方々にも執筆に参加いただきました。また「質の高い成長」の概念がもつ多面的な要素に応じて、様々な専門性・バックグラウンドをもつ国内外の研究者や実務者の方々、研究機関や関係機関から、バックグラウンド・ペーパーの執筆や関連情報・資料の提供などのかたちで数多くのご支援をいただきました。この場をお借りして、本プロジェクトにご協力いただいたすべての方々へ心より御礼申し上げます。

本シリーズが「質の高い成長」の概念について多くの方が理解を深めるきっかけとなり、日本を含む各国における「質の高い成長」の実現に向けた取り組みの一歩となることを願ってやみません。

2025年3月

国際協力機構 緒方貞子平和開発研究所 研究所長  
峯 陽一

## 前書き

持続可能な開発が日本社会の大きなトレンドとなる中、本書は、昨今よく目にする脱成長という考え方をとらずに、これからの成長の道筋を論じるものである。21世紀の世界では、これまでに増して様々な課題が複合的に錯綜している。多くの先進国で見られる格差の拡大は国の分断を助長し、災害や感染症、経済危機などのショックはより大きな影響をもたらすようになり、気候変動に起因する異常気象は世界各地で日常的に見られる現象となった。こうした中、アジア太平洋経済協力（Asia-Pacific Economic Cooperation：APEC）、そして日本は、2010年頃より、相次いで起こるこれらの状況への対応を、成長を構成する要素の一つと捉える質の高い成長という概念を提唱するようになる。それは持続可能な国際目標（Sustainable Development Goals：SDGs）と方向性を同じくするものであり、加えてAPECや日本は直接的に言及していないが、豊かさを測る指標に関する国際的な見直しの議論にも通じるものである。この成長のアプローチは、伝統的な経済成長を否定するものではない。むしろ依然として、経済成長は豊かさ、そして貧困の撲滅に欠かすことのできないものとする。しかし、同時に社会・経済の包摂性、持続可能性、強靱性を成長の一部と捉えようとする。本書はこの質の高い成長というアプローチを、経済学の考え方により解き明かしていこうとするものである。

経済成長は常に政策決定者の中心的課題であった。国の豊かさは、国内総生産（Gross Domestic Product：GDP）で表される成長によって判断されてきた。しかし、人々のウェルビーイングの向上には、所得だけでなく、格差を含む包摂性や災害などへの強靱性、そして持続可能性もともに改善しなければいけない。本書で論じる成長のアプローチは、経済成長と所得以外の厚生を高める要素を同時に捉えていこうとする。それは当たり前のことであるように思われるだろう。実際に、それぞれについて数えきれない議論が行われ、多くの政策が展開されてきた。しかし、これまで格差や防災に関する政策は、成長戦略とは別に考えられてきた。気候変動対策は、現在の成長を制約するものと捉えられてきた（だからこ

そ、国際場裏では常に先進国と開発途上国の意見が対立する)。統合的に考えるということは、当たり前のように極めて難しいことである。理論や政策は、持続可能な成長、包摂的成長、強靱な成長などの名称で、それぞれ個別に議論されてきた。本書では、これらを一堂にレビューした上で、人々のウェルビーイングを、全体として高めるような成長(つまり質の高い成長)への道筋を考える。このような成長へのアプローチは、SDGsと共通する。ただし、SDGsは、貧困削減における経済成長の役割をやや過小評価しており、またSDGs実現のための方法論も必ずしも提示されていなかった。その点を掘り下げる質の高い成長のアプローチとそのための政策は、SDGsを補完し、その目的をより包括的に実現するものと言えるだろう。

ここで提案される質の高い成長というアプローチは、必ずしも開発途上国だけに当てはまるものではない。むしろ、今の日本にも求められる考え方でもある。別の言い方をすれば、現在の開発途上国や新興国が所得を増加させた先に何をを目指すのかを含む指針である。経済発展により所得水準が高まると、成長率はそれまでに比べて下がり始め、つまりはウェルビーイングの改善率も下がっていくということではないはずである。現代の世界がそのように見えているのは、市場経済に拠って立つ経済学の視点と経済統計の問題が大きいのではないかと感じている。本書でもこの点に言及し、しからばどのように捉え直していくべきかを模索している。要すれば、成長とは所得で測られるだけのものではなく、格差などの厚生改善や強靱性の強化も成長の一部であると主張し、こうした質的な側面を成長に統合するような計測はどうあるべきかを論じている。

本書では、質の高い成長を経済学の視点により論じている。必要に応じて補足的な解説を加えているので、経済学の知識をお持ちでない方でも読み進めていただくことができるだろう。官民、社会人・学生を問わず、グローバルな視点から現代の成長のあり方について問題意識をお持ちの全ての方々に、関心を持っていただけたらと思う。『理論編』では、質の高い成長のアプローチのバックボーンとなる基本的な理論をレビューし、その実現のための政策枠組みと、どのように計測されるかを考察する。第10章の第1節において、それまでの章を簡単に振り返っているため、時間のない方は、まず第10章からお読みいただき、その後に関心のあるテーマが書かれた章を参照いただくことも可能である。『事例分析編』では、対象とした5カ国について、成長と包摂性、持続可能性、強靱性が実

際にどのように変遷してきたかを明らかにしている。『理論編』を頭におきながら、このケーススタディを読んでいただくことによって、本書の主張について、更に理解を深めていただけることを期待する。

本書の執筆には、多くの専門家の力をお借りした。事例研究では、それぞれの国の専門家に、質の高い成長の視点からの分析を行っていただいた。本書で取り上げた分野は非常に多岐にわたっており、質の高い成長を構成する要素の間にはトレードオフとなるような関係も含まれている。『理論編』では、そのような異なる要素の分析を、統一的な視点から行うことを特に意識した。理論のレビューと新たなアプローチの構築にあたっては、これまで40年以上、開発途上国経済に関わってきた経験を踏まえて、長期の社会・経済の変容という視点を可能な限り取り入れるよう心掛けた。新しい成長のアプローチを提示するには、そのための理論の整理と構築、実現のための政策と方法論、そして計測という「3点セット」が必要となるだろう。新たな計測が重要であるのは、人々のウェルビーイングの大きさが従来のGDP指標で捉えられている限り、結局のところ、所得の総量を大きくすることが政策目標の中心とならざるを得ないからである。本書では、主として理論的背景を整理しつつ、また事例研究を行いながら政策にも一部触れた。そして質の高い成長をどう計測するかについての試案を提示した。しかし、質の高い成長は非常に多面的な要素を含むものであるため、実際に奏効するような政策・開発の方法論は本書の範囲を超えてはるかに様々である。それらに関しては、本書の姉妹書にあたる細野昭雄先生による『SDGs、変革、質の高い成長』で網羅的に論じられているので、本書を通じて質の高い成長に関心を持たれた方は、是非、そちらも手に取っていただきたい。

本書が意図したような結果を提示できているかどうかは、読者のご判断にお任せしたい。本書の内容は、非常に広範な領域に関わるものであるため、私の学問と知識の範囲では足りないところも多々あり、あるいは誤りもあるかもしれない。お気付きの際には是非ともお知らせいただき、あるいは議論いただければ幸いである。

2025年8月

広田幸紀

## 謝 辞

本書は、2016年に立ち上がったJICA 緒方貞子平和開発研究所の研究プロジェクトの成果を最終的に取りまとめたものである。関係する多くの方々のご協力のおかげでようやく発行に至ることができた。これまでにご支援いただいた全ての方々から感謝する。

最初にこのテーマに取り組むことについてご示唆をいただいたのは、当時、研究所の副所長をされていた北野尚宏氏であり、研究を進めるために必要な体制を整えていただいた。その後、グローバルな環境は変化し、また、私自身も研究の場を大学に移したが、それにもかかわらず完成に至るまでの長い期間、一貫して同研究所からはご支援いただいた。同研究所企画課にて研究全体を運営いただいた、城後倫子氏、増古恵都子氏、光森祥子氏、石塚史暁氏、金潤定氏、齋藤ゆかり氏に厚く感謝申し上げたい。長期間にわたる研究となったので、こうした方々の絶え間ないサポートがなければ本書は完成していなかっただろう。

草稿に対しては、多くの方々から貴重なご意見を頂戴した。特に同研究所のシニア・リサーチ・アドバイザーである細野昭雄先生からは、原稿に対する助言にとどまらず、質の高い成長という概念そのものに対して貴重なアドバイスを幾つもいただいた。定期的にお話を伺う機会をいただき、そのたびに多くの気づきを得ることができた。本書は様々な分野を含む内容であったが、石渡幹夫氏、佐藤一朗氏、小田亜紀氏をはじめとするJICAの関係部局並びに研究所の皆様からは、それぞれのご専門分野について貴重なコメントをいただいた。厚く感謝申し上げます。いただいたコメントの全てに応えられたわけではないが、そのおかげで本書の内容は格段に充実した。こうした多くの皆様の協力にもかかわらず、本書の内容にはまだまだ足りない点も多く、あるいは分析に不備や誤りがあるかもしれない。お気づきの点をフィードバックいただけたなら幸いである。

本書が一人でも多くの読者の目に触れ、質の高い成長というアプローチの体系化とその実践に貢献できれば幸いである。そして開発途上国の貧困が一層削減され、多くの国の人々にとって望ましい成長に近づいていくことに、多少なりとも貢献できるなら、これ以上ない喜びである。

広田幸紀

# 目 次

発刊によせて	i
前書き	iii
謝 辞	vi

## 理論編

<b>第1章 はじめに</b>	<b>1</b>
-----------------	----------

<b>第2章 経済成長概観</b>	<b>10</b>
-------------------	-----------

1. 経済成長と貧困削減	10
2. 経済成長の軌跡	14
3. 成長の恩恵の分配	28

<b>第3章 質の高い成長の概念</b>	<b>39</b>
----------------------	-----------

1. 成長の質と質の高い成長	39
2. 質の高い成長の定義と論点	45

<b>第4章 包摂的な成長</b>	<b>56</b>
-------------------	-----------

1. 包摂的成長の定義と論点	56
2. 構造的不平等と経済成長	66
3. 格差と経済成長	73
4. 格差を是正するための政策とまとめ	87

## 第5章 強靱な成長 98

1. 強靱性の定義と論点 98
  2. 自然災害と経済成長 111
  3. 感染症と経済成長 123
  4. 開発途上国での金融危機と経済の強靱性の変遷 126
  5. 強靱性を高める政策とまとめ 136
- 補論 【政策事例研究】新型コロナウイルス感染症に対する医療インフラの余力のあり方について 140

## 第6章 持続可能な成長： 将来世代を犠牲にしない成長 154

1. 成長の持続についての2つの視点 154
2. 成長の持続性と環境・気候変動と資源 158
3. 天然資源と成長の持続可能性 181

## 第7章 イノベーション、経済の変容と成長の持続 196

1. 成長を分析する枠組み 196
2. 成長の理論と生産要素 198
3. 生産性、イノベーションと社会の変容 208
4. 持続的な成長におけるマクロ経済政策と貿易政策の役割 231
5. 制度と成長の持続性 259

## 第8章 質の高い成長と質の高いインフラ投資 281

1. インフラ投資と成長 281
2. 質の高いインフラ投資とは 286
3. インフラの投資効率と生産性 296
4. 質の高い成長を実現する政策論としての質の高いインフラ投資 302

## 第9章 質の高い成長とSDGs 308

1. SDGs が生まれた背景とその構造 308
2. SDGs を実現する質の高い成長 315

## 第10章 質の高い成長を実現する 320

1. ここまでのまとめ 320
  2. 質の高い成長をどのように測るかについて 334
  3. 質の高い成長の概念を総括する 365
  4. 質の高い成長を実現する 386
- 補論 質の高い成長の計測（試論） 391

執筆者紹介 435

### 第二分冊 事例分析編

#### 第11章 インドネシア

#### 第12章 ベトナム

#### 第13章 ベルー

#### 第14章 コスタリカ

#### 第15章 マダガスカル

